

イラワジは渦巻くとも

—続かかる軍人ありき—

伊藤桂一



伊藤桂一
イラワジは渦巻くとも
— 続かかる軍人ありき —

文藝春秋

〈著者略歴〉

大正6年三重県生まれ。

昭和13年より終戦まで軍隊勤務。

中国の戦線に参加する。

昭和27年「雲と植物の世界」にて

芥川賞候補となり、昭和36年「蟹

の河」にて第46回直木賞受賞。

現代詩人会常任理事。

イラワジは渦巻くとも

昭和四十八年九月二十五日 第一刷

定価 六八〇円

著者 伊藤桂一

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地

電話番号 東京(〇三)三六二二一

郵便番号 一〇二

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

・万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

イラワジは渦巻くとも
―続かかる軍人ありき―

目次

イラワジは渦巻くとも……………	5
鶏公山の麓……………	47
兵長、わが道を往く……………	75
連雲港の夕映え……………	103
ブーゲンビリアよ、咲け……………	137
赤い夕陽の道……………	165

□ 装幀 菅野 充造

イラワジは渦巻くとも

「——日本兵諸君。動かず、そのままできけ。君らは勇敢に戦った。しかし、もうミチナの戦争は勝敗がきまり、守備隊の玉砕も時間の問題となった。君らは、なにを好んで、陥落寸前のミチナへもどろろとするのか。武器をすてて、手をあげて、前面の岸へ出て来給え。君らは正面と両側から、計十二挺の重機関銃に狙われている。助かる道はない。犬死はやめて、すぐに降伏し給え」

前面の密林の、どこもしれないあたりから、敵のスピーカーが、流暢な日本語でそう叫んでいる。八江正吉中尉——を長とする先発の一隊は、そのとき、膝を没する湿地の中に釘づけにされていた。この湿地を渡り、前面の丘陵上の密林地帯を抜けると、本隊が守備している、ミートキーナ（中国名ではミチナ〈密支那〉）の陣地へ入るのである。先発隊は、隠密に行動して、湿地を渡りはじめたのだが、そのちょうどまん中へ来たとき、ふいにまわりから重機の乱射を浴びたのだ。数名の兵隊が、みるまに水の中に顛倒した。すると、銃声がやみ、つづいてスピーカーが、叫び出したのである。

一隊の指揮をとらねばならない八江中尉は、このとき、絶対に降伏はできない、とすれば、敵の正面へ必死に突っ込むしかない、と考えた。同時に、先行のわれわれが全滅しても、あとの連中はそれによって充分警戒して、なんとか味方の陣地へたどりついてくれるだろう、と期待した。そうして、これは私事に關してだが、

（仏舍利の御加護があるはずだ。それを信じて突っ込もう）

と、覚悟をきめた。八江中尉は、

「奴らには耳をかすな。前進するぞ！」

といって、自ら先に立って突き進んだ。敵の重機が猛烈に火を噴きはじめた。まわりは再び、銃弾のための水飛沫が濛々とあがる。部下たちは、各所で、呻いては水に倒れ込み、八江中尉自身もまた、腰のあたりに強烈な衝撃（鉄棒で殴られた感じだ）を覚え、水の中に顛倒した。それきり、下半身は、しびれたまま、動かなくなった。

北ビルマの要衝ミートキーナ——は、歩兵第百十四連隊を基幹とする部隊が守備に当たっていたが、ここが、敵の重囲に陥ちたのは、昭和十九年の五月十七日以降である。米支連合の空挺隊が強行着陸して来て以後、その囲みは、日とともに厚く、攻撃も熾烈になったのだ。どう戦ってみても、日本軍守備隊には、兵員、物資ともに補充がないので、結果はみえていた。攻防十日を経ずして、すでに山砲は、一門一日の割当弾数わずかに三発、という悲境に立ちいたってしまった

た。しかし、守備隊は実に善戦した。その善戦ぶりは、かえって敵側がこれを証明してくれている。敵将・蔣介石の、自軍を鼓舞するための訓示中に、つぎのような一節がある。

「——ビルマ並びに怒江作戦の戦績をみるに、わが中国軍にして、極めて軫念しんねんに堪えざるものあり。元來優良部隊に於ても、未だ予期の戦果を収むるに至らず、遂に重大なる挫折を受けるに至る。よろしく日本軍の拉孟らもう守備軍或いはミチナ守備軍が、孤軍奮闘、最後の一兵に至るまで、任務を全うしあるを範として……」とあるが、敵將にまで、その勇戦ぶりを賞揚された例は、渺すくないといえよう。

この、ミートキーナで、敵の重囲に屈せず抵抗を続けているとき、守備隊は、無電で、思いがけない情報を入手している。それはミートキーナから北方の各地へ派遣されていた部隊が、ミートキーナが包囲されたので帰還できず、北へ十二マイルの、サンプラバム街道の一角に集結待機している、というのである。兵数四百、野戦病院の分院もまじっている。もちろん、患者以外は無疵むきなのだ。

ほぼ四百の無疵の精銳——を、いま、守備隊へ導き入れることができたなら、なんとしても心強いのだ。そこで、連隊長の丸山大佐は、部隊本部情報班長の八江正吉中尉を呼んで、この任を命じ、

「むつかしい仕事だが、むつかしいから君に頼むのだ。最後の頼みと思って、やってくれ」

といった。このとき、平井副官が傍らで、

「部隊長殿。この任務だけは、八江中尉にやらせてください。危ない仕事は今までみな八江君にやらせています。この人は、生き残っていてもらわんと、これからが困るのです」

と、いった。ビルマ語が通じ、現地事情に明るく、かつ戦闘能力も秀れている、八江中尉の使い道は多かつた。彼は、ミートキーナ守備隊へ来てからも、もっとも顕著な働きぶりを示している。敵の包囲のはじまった直後は、情報班の数名の兵員を率いて、駅付近へ進出し、奇策を用いて、敵の虚を衝いて反撃を加え、遺棄死体実に五百を数える戦果をあげている。多量の兵器、糧秣をも入手した。奇策——というのは、背よりも高い草を利用して敵の陣中にもぐり込み、円の中心にいて周囲をなぎ払うような形で、撃ちまくって、少数の利を生かして、大敵を倒したのだ。到着したばかりで、数だけをたのんで、地の利にうとかった敵は、周章狼狽した揚句、同士打ちを演じ、その地点においては潰滅したのだ。丸山大佐は、八江中尉のこうした功績を買っているわけだが、平井副官は逆に、それだから、今後の状況悪化に備えて、八江中尉を残したかったのである。

結局、八江中尉自身が副官を説得し、死んで帰るようなことは絶対にしない——と、約束ともいえない約束をして、ともかく、四百の集結部隊の指揮導入のために、出発することにしたのだ。それは、行きも帰りも決死行である。一行は八江中尉の他、情報班から村山軍曹、藤波上等兵、憲兵隊から藤田軍曹（中国語ができた）、さらに中尉の手足になっている現地人のタキンネツベという青年が、道案内として参加した。

この任務のきまったとき、八江中尉は、ミートキーナ北側のシタップ村の畑の中の防空壕で生活している、県知事のウラテン——に、別れの挨拶を述べに行った。八江中尉は、このウラテン知事及びその家族たちと、切っても切れぬ関係があり、副官には約束したものの、自身は死ぬ公算の大きいのを知っていたし、それで、今生の別れを告げるつもりであったのだ。長身瘦軀^{そうぐ}、五十歳を一つ二つ越えている温雅な風貌のウラテンは、防空壕の外で八江中尉に会って話をきくと、「今にはじまったことではありませんが、あなたは実にあぶない仕事ばかりさせられています。

私が、バーモからこの県知事をひきうけてやって来ましたが、あなたの人間の誠実さに殉じる気持があったからです。私は日本軍がビルマへ来て今日まで、数多くの人々と交わってきました。メイミョウで牟田口軍司令官に招かれ、大東亜戦争の意義を説かれたときも、また、あらゆる機会に知り合った方々の考え方にも、全幅の賛意は表せませんでした。われわれが望む、ほんとうの独立——のためには、なにか懸念があったのです。果たして、このごろでは、ビルマ人の心は日本軍を離れつつあります。しかし、私のあなたに対する気持だけは、日とともに強まるのです。それは、あなたほど、ビルマのことを考えてくれる人はいなかったからです。そのあなたが、私の眼の前から消え去ることは、私自身の生きる支えを失うことになります。どうか、考え直してください。私が部隊長に話して、人を交代してもらいます」

そういつて、ウラテンは、しきりに落涙した。この人は、驚くべく信義に厚かった。八江中尉は、ウラテンを説得するのに、甚だ骨を折った。あきらめてもらうよりほかはない戦況であるこ

とを、しばらく懇々と話すと、ようやく納得してくれたが、そのときウラテンは八江中尉に、家宝の仏舍利を贈ってくれている。それについて、ウラテンは、つぎのように話した。

「実はあなたもご存じのように、私の家は昔のビルマ王族であり、私はその長男です。私の父は日本軍より王族の待遇をうけて、ずっとメイミョウにおります。昔、ビルマ王朝が強国として栄えていたとき、私の先祖は大軍を率いてインドと戦い大勝を博し、そのときインド王国から仏舍利と釈迦の髪の毛を贈られました。髪の毛はラングーンのシュエダゴン・パゴダ（仏塔）に祀られ、世界仏教徒の信仰をあつめています。仏舍利は代々わが家に秘宝として伝えられて来ましたが、あなたは私の息子です。あなたの生死は、私たち家族の存廃にかかわる大事です。しかもあなたは熱心な仏教徒です。私はそれで仏舍利の一つを、あなたにお守りとして差し上げたいと思うのです。必ず危難を免れると信じます」

そうして、ウラテンは、まわりに集うていた家族のうち、次女のテンキキにあって、仏舍利をとりよせ、象牙の箱にしまわれている仏舍利の一つをとり出すと、それを三女のキメテンに命じて縫わせた小さい絹の袋におさめさせ、さらにそれを、八江中尉の軍帽の中に縫いつけさせたのである。仏舍利というのは、釈迦の遺骨で、小さな粒である。

これが七月十四日のことで、その三日後、八江中尉の一行は、雨中、敵の囲みを衝いて、出発した。陣地の北方は、森林と湿地が交錯しているが、降雨のためどこも増水していて、これが脱出には便宜となった。といっても、敵の歩哨線を、じりじりと地を匍って通過し、鉄条網の切れ

目をさがしてはぐりぬけ、雨水と泥に濡れるので全身に悪寒がくるが、それに耐え、暗夜を磁石だけを頼りに、北へ北へと進んだのだ。敵の布陣地帯の縦深五百メートルをぬけ切って、ようやく姿勢を高くして歩ける地点まで到達するのに、実に、五時間余もかかっていた。

八江中尉の一行は、無事に、サンブラバム街道沿いの、密林内に集結していた部隊をみつけると、向うも、無電で、救援の出たことは知っていたので、そこで直ちに本隊へ復帰する手筈をとった。歩行不能の患者は、筏を組んで、ミートキーナへ送った。サンブラバム街道はイラワジ河に沿っているのだから、同じイラワジ沿いにあるミートキーナへは、筏を流せば着くのである。もっとも、敵に発見されなければだ。ここへ来るまでも、街道上で、物資運搬の牛車を曳いた中国兵の一団と、二度も出会っているから、寸時も油断はならない。

元氣な兵員は、四個小隊に編制した。伊熊中尉、伊藤少尉、麻生軍医らが指揮をとり、八江中尉は隊長として先頭に立った。日本軍の無電連絡は、当然、敵側にも盗聴されている——と、これは八江中尉も察していたことだが、果たして、敵は、サンブラバム街道から撤退復帰してくる一隊を、巧みに罠にかけるべく、待ち伏せていたのだ。偶然遭遇したとは思えない、攻撃のされ方だった。それもミートキーナ陣地へ、あと一步の湿地帯の一角で、敵の弾幕に包囲されつくしたというのは、たしかに無念のことであつたのだ。

下半身不随の状態となっていた八江中尉は、村山軍曹に抱えられて湿地を後退し、結局、先発

隊は、多大の犠牲を払って、後方の森林内へ引き返したのである。このとき、

「隊長がやられたぞ。退却するぞ」

と、スピーカーが嘲笑している。ちゃんとみているのだ。しかし、撃っては来なかった。いずれは降伏する、と見込んでいたからだろうか。勝つときまっているための、余裕を持っていたからだろうか。森林内で、八江中尉は、負傷をもかえりみず、伊熊中尉を呼ぶと、

「陣地構築を急がしてくれ。上か下か、どちらからか、必ず攻撃してくる」

といって、径百メートルの半円陣地を掘らせた。敵が、ほんとくわけはない、と思ったのだ。ともかく、夜まで粘って、暗くなって、行動を起すしかないのだ。兵隊たちが陣地構築をはじめ出したとき、早くも頭上に爆音がして、見上げると、樹間に覗く空に、偵察機が来ている。すると、敵陣地から発煙弾が飛んで来て、敵機と観測連絡をした。

「用心しろ。撃ってくるぞ」

と八江中尉の叫んだときには、四連装の砲撃がはじまっていた。これは、トントントントと連続の発射音のあと、グワングワングワングワンと、頭上の樹の枝に触れて榴霰弾りゅうせんたんが炸裂する。それが釣瓶撃ちだ。死傷者が続出した。八江中尉と行動を共にした藤田憲兵軍曹も、このとき重傷を負っている。

この攻撃の終わったあと、八江中尉は、隊の編制を解き、暗くなったら、気の合う者同士数人ずつが集団を組んで、各個に、日本軍陣地にもどるように指示した。もはや団体行動はとれなかつ